

「旅館金波楼」の国登録有形文化財への申請資料の注釈

森山 学*

An Annotation of the Application Form about 'Ryokan-Kinparo' for 'Registered Tangible Cultural Properties(buildings)' by the National Government

Manabu MORIYAMA*

'Ryokan-Kinparo' is a Japanese inn built in 1909 in Hinagu. In 2009, it was registered for 'Registered Tangible Cultural Properties(buildings)' by the National Government. I made the application form for presentation. A purpose of this paper is to annotate of my opinion written in the application form. Further this paper publishes the present plans and the elevation of the gate and the wall. These were made by me.

キーワード：旅館 金波楼，登録有形文化財（建造物）

Keywords：Ryokan-Kinparo, Registered Tangible Cultural Properties(buildings)

1. はじめに

平成 21 年 3 月 19 日に開催された国の文化審議会は，文部科学大臣に対し，熊本県八代市の日奈久温泉街に建つ「旅館金波楼」の本館，大広間棟，正門及び塀について，国の登録有形文化財（建造物）に登録するべく答申を行い，同年 4 月 28 日，「旅館金波楼」は登録された。

これにより登録有形文化財の総数は全国で 7513 件，熊本県で 106 件，八代市では「郡築二番町樋門」（1938（昭和 13）竣工，平成 10 年登録），「シャルトル聖パウロ修道院記念館」（1900（明治 33）竣工，平成 12 年登録）に次いで 3 件目となった。また登録対象のうち本館は木造 3 階建てであるが，木造 3 階建て以上の旅館・ホテルの登録としては，全国で 23 件目となった。

そもそも登録有形文化財（建造物）とは平成 8 年 10 月に実施された制度で，従来の指定制度とは異なり，保存と活用を同時に図ることを促す点で新しく，築後 50 年以上の歴史的建造物が登録対象であることから，近代の建造物が多く登録されることで，その保護に有効である。

また所有者にとっては内部の改修を自由に行えることから，より自由な制度であり，改修に伴う設計監理費の補助や税制上の優遇措置を受けることもできる。

今回の「旅館金波楼」の登録は，所有者にとっては 2010（平成 22）年に創業 100 周年を迎える記念として，八代市にとっては歴史的建造物が多く残る日奈久温泉街の建造物の保存・活用のための最初の一石として，両者ともに望ま

れたものであった。

この登録申請にあたり，八代市教育委員会文化課からの依頼を受け，平成 20 年 10 月 30 日，11 月 5 日，7 日に現当主・松本寛三氏に対するヒアリング調査，実測調査を行い，意見書，現況平面図，正門及び塀の立面図を作成した。

また「旅館金波楼」の調査は，すでに 1999（平成 11）年から 2000（平成 12）年にかけて，北野隆氏，熊本大学北野研究室（当時），八代市教育委員会によって「日奈久歴史的建造物群基本調査」として実施されており，今回の資料作成においても当時の調査結果を十分に参照・活用した。

今回の報告では，登録申請のために作成した資料のうち，意見書の本文を掲載し，これに新たに注釈を加えることで，本文内容について解説を行い，さらに現況平面図と正門及び塀の立面図を掲載した。

2. 「旅館金波楼」の意見書の本文

旅館金波楼本館，同大広間棟，同正門及び塀にかかわる意見書

「金波楼」が位置する日奈久温泉（日奈久上西町）は，熊本県の県南地域の中心都市・八代市の南にあって，北西は八代海に面し，南東は八竜山系の峰々に囲まれた温泉地である。かつて漁村であったが，1409（応永 16）年，甲斐重村^{注1)}の家臣・浜田右近の子，六郎左衛門が温泉を発見し，のちに温泉湯治場として栄えた。2009（平成 21）年に開湯 600 年を迎えるため，まちづくりが活発化している^{注2)}。

藩政時代の 1657（明暦 3）年^{注3)}，この泉源に「御前湯」，

* 建築社会デザイン工学科
〒866-8501 熊本県八代市平山新町 2627
Department of Architecture and Civil Engineering,
2627 Hirayama-shinmachi, Yatsushiro, Kumamoto 866-8501

「お次ぎの湯」, 「平湯」^{注4)}から成る藩営温泉が, 設置されている(「本湯」)。この本湯前を薩摩街道が通っており, 宿場町を形成した^{注5)}。また日奈久港は藩政時代に交易の津口に指定され, 明治30年代には定期航路も就航している^{注6)}。

現在(2008年11月)営業している20軒の旅館の中で, 最古の旅館建築は「八代屋旅館」で, 西南戦争(1877(明治10))以前の建設である^{注7)}。また日奈久温泉には明治から昭和初期に建設された木造3階建て旅館が8軒^{注8)}現存するが, そのうち最古のものは1887(明治20)年創業の「鏡屋旅館」の3階建ての棟である^{注9)}。これら旅館群には座敷飾り等に素晴らしい数寄屋風意匠が見られる。また木造3階建て旅館が密集していることが日奈久温泉のまちなみの特徴である^{注10)}。

金波楼は, 1909(明治42)年7月7日の九州日日新聞には, 1907(明治40)年6月起工, 1909(明治42)年7月にほぼ竣工し, 同年8月創業予定と書かれている。代々の口承によれば1910(明治43)年8月に創業と伝えられている^{注11)}。本湯に程近く, 木造3階建てで, 日奈久温泉でも群を抜いて規模が大きく豪華である(建設費約2万円)。建築主は松本岩三郎^{注12)}, 大工は牧喜太郎(日奈久)^{注13)}, 木材は主に人吉から運んでいる^{注14)}。当初, 泉源は藩主入湯時の宿泊所であった隣接地にて1863(文久3)年に発見された「松本の湯」を利用した, とされる^{注15)}。「金波楼」の名前は, 3階建てから八代海の金波が展望できたことに由来する^{注16)}。岩三郎は当地繁栄の一策として, また体の悪い三男・参郎(～1928(昭和3), 初代社長)が家内で仕事ができるように, 旅館を建設した^{注17)}。元来松本家は日奈久地域でも有数の家系で, 代々, 寸志侍, 庄屋, 町長等を務めてきた^{注18)}。岩三郎は他4名とともに自費で明治新田干拓を行って^{注19)}。

現在の社長・寛三氏(1953～)は三代目で, 参郎氏の孫にあたる。「金具屋」^{注20)}(長野県, 国登録有形文化財(平成15年))で修行を積んだのち

—(略: プライバシーの問題のためホームページ公開版では省略させていただきます。『熊本高等専門学校研究紀要』第1号(平成21年2月)を直接, ご覧ください。)—

金波楼については「あるものを大事に使う, 磨きをかけて」建物を活かすことを経営の方針とし, 露天風呂の増設(1997(平成9)), ギャラリー増設(2001(平成13))などを行ってきた^{注21)}。2010(平成22)年に創業100年を迎えることを契機に国登録有形文化財をめざす。

ちなみに太平洋戦争当時陸軍病院分院の療養本部になった^{注22)}他, 三笠宮殿下(1952(昭和27)), 高松宮殿下(1960(昭和35))もご来館・ご宿泊されている。

このように, 金波楼は藩営温泉に指定された由緒ある日奈久温泉にあつて, 木造3階建て旅館の密集するまちなみの中でもっとも大きく贅を尽くした旅館として, それらを代表する旅館であり, さらに熊本県内でも現存する中で, 最大級の木造3階建ての建造物である^{注23)}。また当旅館の経

営方針からも国登録有形文化財にふさわしい建造物である, とと言える。

①旅館金波楼本館^{注24)}

敷地北側の前面道路に接する凹型平面の建物(A)及び, 北東角のL字型平面の建物(B)が本館である。どちらも木造3階建てで, Aは1909(明治42)年に建設された当時のもので, 一階には凹部分に玄関がある他, フロント・事務, 小上がり, ギャラリー, 休憩所があり, 二～三階には客室がある。Bは隣接していた「本伊勢屋」^{注25)}を1914(大正3)年に買収し, 北側へと曳き家したもので, 客室にあてられている。

屋根は棧瓦葺きで, Aの向かって右側正面が入母屋造, 他は寄棟造, 各階に庇が巡る。一階庇の出桁を持ち送りが受けている。外壁は木製建具のガラス窓が大部分を占めているが, その他は主に漆喰塗りである。ガラス窓が取り付けられたのは昭和初期で, 本来は雨戸はついていたものの, 客室縁側の外周に高欄が設けられただけの吹き放しであった。一階小上がり前には堅格子がある^{注26)}。棟高はAで約13.5mである。

玄関ホール奥には庭園があり, 木製建具のガラス戸と高欄で仕切られる。このガラス戸は普段は開けて吹き放しとしている。その高欄と床板には桜を用いている。またホールから内法幅約1.7mの大階段が上階へ続く。階段の親柱は蛇腹の繰形に擬宝珠を模したレリーフを施し, その上に擬宝珠を乗せた和洋折衷の意匠である。各客室には書院障子の棧などに手の込んだ意匠が散見できる。

また建物下には現役の温泉排水溝があり, それを上から覗く井戸状の開口が庭にある。間口は内法で85cm四方の井桁状石組みで, かつては潮見の役割を果たした。満潮時には海水の流入を防ぐため, 今はないハンドルで門扉を閉鎖し, 干潮時には開門して温泉を排水した。

②同大広間棟^{注27)}

本館に接続して敷地南西側の敷地境界線に沿う辺り, 以前は浴室と渡り廊下^{注28)}があった位置にあり, 二代目当主・謙吉の時, 大工・高橋氏(熊本市)^{注29)}の手によって1938(昭和13)年, 竣工している。木造2階建ての矩形平面の建物で, 屋根は入母屋造で南・東側に庇が巡る。仕上げは棧瓦葺きである。外壁は南・東側は木製建具のガラス戸だが, 西側は現在では新建材で覆われている。一階は厨房のほか, 浴場へと続く通路となる縁側があり^{注30)}, 二階には80畳敷きの大広間と配膳室がある。特に大広間は網代組の舟底天井, 枝付きの柱, 一間幅の障子・襖, 実際の松, 竹, 梅の枝をあしらって松・竹・梅の意匠を施した欄間, 畳敷きの高欄付き縁など特徴的である。さらに床, 違い棚, 琵琶床で構成された座敷飾りは, 自然木の銘木を大胆にあしらった豪快・大胆なもので, 野趣あふれる鼠子の床柱, 陶器製の床框など数寄の精神を充分に感じられる。

また厨房からは高さ約15m, 上部を柱頭に模した煉瓦造

煙突が建つ。本来、旅館で使用する食器類を焼くための窯の煙突であったが、現在は内部をダムウェイターとして活用している。建設年代は昭和初期以前^{注31)}のようだが詳細は不明である。大広間の床框はここで焼かれたものである。

③同正門及び塀^{注32)}

敷地北側の前面道路に沿って、昭和初期に建設された。正門は棟門で棧瓦葺きの切妻屋根と板戸の門扉で構成される。棟高約4mで間口は内法で幅約2.3m、高さ約2.35mである。正門の向かって右手の塀に潜り戸がある。塀は下部板張り部分が大和張り、上部漆喰部分に開口が開けられ、頂部に屋根が乗る。大きく二つに分割でき、東側は高さ約3.6mで、開口は格子、瓦は棧瓦、西側は高さ約3.2mで、開口は虫籠窓、瓦は平瓦である。

3. 「旅館金波楼」の意見書の注釈

注1) 菊池家の家督を相続することができなかった武村の子。甲斐に逃れ、のち足利尊氏方となり、九州南朝の有力武士である菊池家を討つべく九州へ向うも菊池武重に敗れる(1338(延元3))。

注2) 「日奈久温泉開湯600年祭」(同実行委員会)、まちづくり交付金制度による都市再生整備計画(八代市)、地域資源∞全国展開プロジェクトによる「路地裏ツアーリズム日奈久」開発事業(八代商工会議所)、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」による「地域温泉街再生と共同したエンジニア教育」(八代高専)、足湯建設(日奈久温泉足湯建設促進期成会)、「第10回九月は日奈久で山頭火」(同実行委員会)など。

注3) 三代藩主・細川綱利(1643(寛永20)～1714(正徳4))の時代。

注4) 「御前湯」は藩主用、「お次ぎの湯」は士分用、「平湯」は平民用。「平湯」は無料で明治初年まで混浴だった。

注5) 藩政時代に整備された熊本の四街道の一つ・薩摩街道は熊本、八代、日奈久、佐敷、水俣に宿場を置く。日奈久には藩営温泉周囲にお客屋、お茶屋、下御番所、高札場、藩の米蔵があった。お客屋は藩庁の直支配、松井家の請け支配という二重支配系統だった。

注6) 1879(明治12)年就航の三角一米ノ津間の連絡船が寄港していた。1895(明治28)年、大型船舶の停泊に備えた乱れ谷積み石造防波堤が築造される。明治30年代、肥後汽船、天草汽船の定期航路が就航する。

注7) 現在は旅館業を廃業。西南戦争の折、1877(明治10)年3月19日に官軍が艦砲を発射しており、当時の弾痕が柱に残ることから建設年代が推定されている。

注8) 鏡屋旅館、旧長洲屋旅館(2棟)、旅館金波楼(2棟)、新湯旅館、旅館泉屋、旧旅館すみ田、不知火ホテル、旧多幸満荘。

注9) 建設年がほぼ特定できるものとしては最古(注25)を参照)。1863(文政8)年、安西清の湯発見後、共同

浴場を設置。1887(明治20)年2月に「鏡板屋」として旅館を創業。木造3階の棟は創業当時から使用しているもので、建設年もその頃であると推定できる。大工は金崎久八(日奈久)。

注10) 同じような事例に14軒の木造3階建て以上の旅館が建ち並ぶ銀山温泉(山形)がある。温泉郷としては湯田中渋温泉郷(長野)に多くの木造3階建て以上の旅館が残る。

注11) 「日奈久歴史的建造物群基本調査」(1999(平成11)～2000(平成12))時では不明だった建設年が明らかになった。ただし創業予定年(九州日日新聞)と創業年(口承)の食い違いの原因は不明。

注12) 九州日日新聞では「松本帰三郎」。ただし松本家家系に該当者はいない。松本家の口承により「松本岩三郎」とした。

注13) 「日奈久歴史的建造物群基本調査」(1999(平成11)～2000(平成12))時では不明だった大工が明らかになった。ちなみに「本湯」第四期浴舎(1899(明治32)竣工)の番匠の第一に「牧吉太郎」の名があり、同一人物の可能性が高い。

注14) 九州日日新聞より。口承では、木材は松本家の山から切り出した、とされている。

注15) 現在の「旅館金波楼」駐車場。文献(2)による。ただし泉源について口承はされていない。

注16) 金波の様子は大広間棟の床框に描かれている。

注17) 前者は九州日日新聞より、後者は口承より。

注18) 例えば寸志侍に岩三郎、清三郎、第12代町長に教太郎、第16-17代町長に栄之助など。

注19) 岩三郎の他、坂田貞、岡本徳馬、村津三郎、南種知が出資。1898(明治31)年4月竣工。

注20) 渋温泉(長野)。木造4階建ての「斎月楼」(1936(昭和11)竣工)が国登録有形文化財(建造物)。

注21) 近年の最も大きな改修は、平成17年、松井建設(株)九州支店一級建築士事務所により、本館南東から大広間棟にかけての居住エリア、厨房を御食事処、厨房に改修した工事である。今回作成した現況平面図は、この際的设计図書を十分に活用した。

注22) 「旅館金波楼」のほか、新湯旅館、柳屋旅館、鏡屋旅館も療養所として活用された。

注23) 県内ではこの他、「山海館」(湯の児温泉)の「磯館」(1955(昭和30))が木造5階建てで最大規模に相当する。

注24) 建築面積約568㎡。作図した現況平面図より求積図を作成し求めた。

注25) 本来「本湯」方向(南東)にあった建物を前面道路側に曳いた。「本伊勢屋」の買収年は判明しているが、建設年は不明である。ただし文献(2)には、西南戦争時に「本伊勢屋」の4階壁面を砲弾が貫通したと記述されており、写真が掲載されている。この写真から現在の建物との比較は難しいが、当時の

建物が減築されたかたちで曳き家されたとすれば、建設年は1877（明治10）年以前となり、日奈久温泉街で最も古い木造3階建て旅館となる。今後の調査が必要とされる。

注26) 出格子。その他、「脇門」と呼ばれる入口がある。

注27) 建築面積約356㎡。

注28) 渡り廊下の位置は現在の大広間棟一階の縁（廊下）に相当する。

注29) 「日奈久歴史的建造物群基本調査」（1999（平成11）～2000（平成12））時では不明だった大工が、松本氏へのヒアリングで明らかになった。

注30) その他、注21) で述べた御食事処が大きな面積を占める。

注31) 建設年代については、松本氏へのヒアリングから大広間棟建設以前からあったことが分かったため、「昭和初期以前」とした。

注32) 総延長約26.25m。

4. 「旅館金波楼」の作成図面

登録申請にあたり、「日奈久歴史的建造物群基本調査」の際に作図された平面図をもとに、平成17年の改修時の設計図書（松井建設（株）九州支店一級建築士事務所）ならびに実測調査によって、一～二階の現況平面図を作成した。ちなみに三階平面図は、改修が行われていないため、「日奈久歴史的建造物群基本調査」の図面に室名を記入したのみで、特に手を加えなかった。

作成した現況平面図を図1、図2で示す。

また登録対象のうち正門及び塀については、八代市教育委員会文化課の協力を得て実測調査を行い、新たに立面図を作成した。作成した立面図を図3で示す。

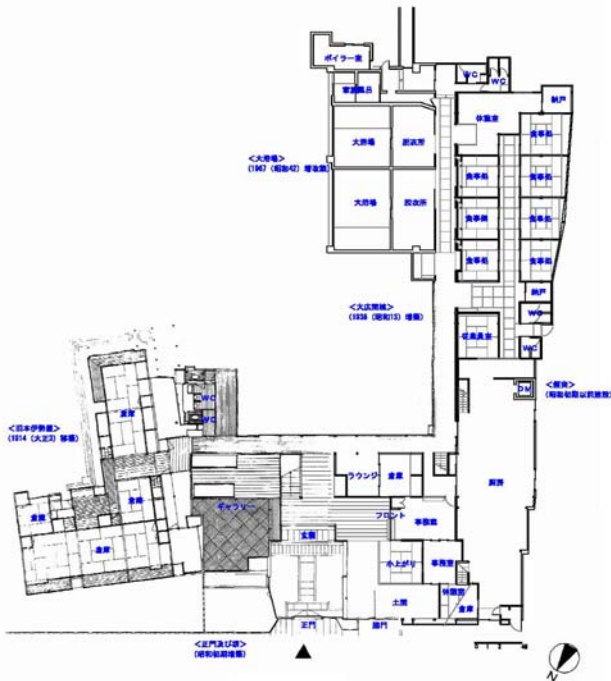


図1 「旅館金波楼」 現況一階平面図

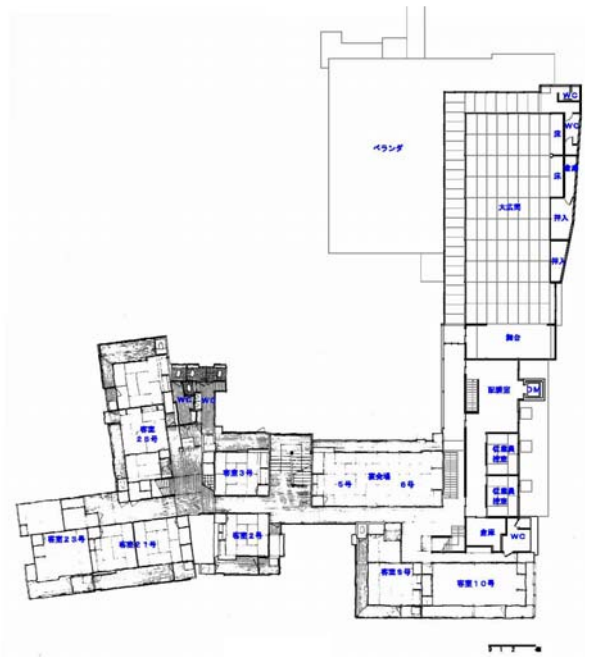


図2 「旅館金波楼」 現況二階平面図

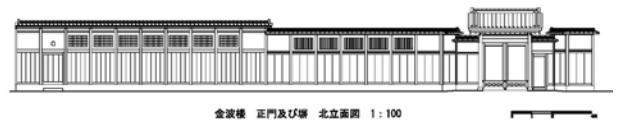


図3 「旅館金波楼」 正門及び塀 立面図

謝辞

本研究の遂行にあたり、「旅館金波楼」の松本寛三氏、ならびに八代市教育委員会文化課より協力をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

文 献

- (1) 九州日日新聞, 1909 (明治42) 年7月7日号
- (2) 中原文敬: 「日奈久の歴史」, 日奈久の歴史出版後援会(1970)
- (3) 中原文敬: 「日奈久温泉神社史」, 温泉神社社務所(1954)
- (4) 八代市史編纂協議会, 養田田鶴男: 「八代市史」, 第五巻, 八代市教育委員会 (1978)
- (5) 「日奈久の街並みガイドブック」, 八代市教育委員会文化課(2001)
- (6) 文化庁文化財部: 「総覧 登録有形文化財建造物 5000」, 海路書院(2005)
- (7) 熊本県教育委員会: 「熊本県の近代化遺産」, 熊本県教育委員会(1999)
- (8) 岡崎雄三: 「日奈久の歴史」 (プリント資料)
- (9) 旅館金波楼: 「金波楼の沿革」 (プリント資料)
- (10) 宮本和義: 「山海館磯館」, 旅, 820号, pp.166-169(1999.5)
- (11) 宮本和義: 「和風旅館建築の美」, JTB 出版事業局(1996)